

曾野綾子



第6卷



曾野綾子選集Ⅱ 第6巻

幸福こうふくという名なの不幸ふこう

いま日は海うみに

定価一、九〇〇円

著者——曾野綾子そのあやこ

編集人——佐野寧

発行人——堀内稔

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一
大阪市北区野崎町八の一〇
北九州市小倉北区明和町一の一
〒一〇〇
〒五三〇
〒八〇二

印刷所——凸版印刷株式会社

製本所——大口製本印刷株式会社

加藤製函印刷株式会社

第一刷——昭和六十年二月十五日

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

ISBN4-643-27060-8 C0393

© 1985, Ayako Sono

目次

幸福という名の不幸

5

いま日は海に

369

解説 前野外吉

595

装画・装幀
淡谷次郎

曾野綾子選集Ⅱ

第6巻

幸福という名の不幸
いま日は海に

幸福という名の不幸

第一章 虹の中の家族

1

榎並^{えのり}黎子^{れいこ}は、父母の慈愛を春の曙のように受けて生まれた娘だった。他人がそういうのではない。黎子自身がそう思うのである。初めて父の愛を確認したのは、今から十一年前、父が死んだ十七歳の年だった。

葬式とそれに続く一連の宗教上の儀式が終った後、或る日、黎子は父が戦前にイギリスで買い、そのまま愛用していたマホガニイの揺り椅子に坐っていた。昔から、父はこの椅子に坐り、膝の上にすっぽりと黎子を乗せてくれた。父の膝はそこだけ、一切の暗く悲しく不安なものを受けつけない場所だった。黎子は父の胸骨の上にお河童^{かまやつ}の頭を載せていた。温くて、どっしりとして、巨人に護られているようだった。しかし今、そのように黎子を包んでくれるものはない。マホガニイの椅子は、堅く、父の骨でできた椅子のように感じられた。黎子はその椅子に顔を伏せた。椅子には生前の父の愛用していた葉巻の匂いが、父の体臭のようにしみこんでい

た。その香に頬をすり寄せながら、突如として黎子は号泣した。

その時初めて、黎子は、もはや誰も自分を守ってくれないのを感じた。母には怒濤のように押し寄せる外界の冷たい苦しい空気をはねかえす力はない。

黎子は初めて、父の偉大さを感じた。それと共に、狭心症で斃^たれた父は、身をもって今まで冷酷な社会から家族を庇^{かば}い続けて来たのだと思った。

父は何を残してくれたのだろう。

黎子は今でも時々考えることがある。

父は黎子の考える最も好ましい男性の一人であった。何よりも父は黎子に、この世は信じるに価するものであることを教えてくれた。誠実で、寛大で、忍耐強く、ユーモラスで、そのような徳がありさえすれば、この世で最低限、暖い家庭を作ることができ、その中で家族は心ゆくばかり甘えあい、許し合っている、という、普遍的な幸福の典型を実際に作ってみせてくれたのだ。それは娘にとって何よりも大きな贈りものだ。

黎子はその時、一つの光景を思い出していたのだ。それは黎子の父が、商社会社のニューヨーク支店次長として、三年間勤務していた時のことだ。母の小夜子^{さよこ}と姉の暁子^{あきこ}と黎子の三人は、父より数ヶ月遅れて父の任地に着いた。黎子は十四

歳、姉は十八歳の時である。一家はニューヨーク郊外——そこはニュージャーシー州だったが——典型的な木造家屋の一軒家を借りて住むことになった。二階には寝室が三つあり、階下には寒い外から帰ってくるといつもほっとする温さに満ちた台所が、窓の外に楡の大木の見える食堂と居間に連っていた。その楡の木の下で春になるとリスが遊んでいるのを、何とかして驚かすまい、と家族は息をひそめて窓から覗いた。

家のすぐ近くには、大きな池があり、その周囲は、なだらかな岡と森に綴られていた。或る日曜日、一家は池の畔にビクニックに行き、帰りがけに突然、息をのむほどの壮麗な虹が、池の対岸に立ち上ったのを見た。すると一家は自然にその虹の方へ手をつないで歩み出していった。父と黎子と暁子と母、というふうに、横に並んで……。その時、黎子は、ああ、今、私たち一家はしあわせなのだ、と叫びたい思いだった。

今、黎子の眼には、十四歳の自分を含む一家四人が、燦然たる七色の光の半円に祝福されながら、岡の頂きへと登って行った姿がありありと見える。虹は神が平凡な庶民たちの慎しいしあわせを希う心に対する無言の勲章として、作られたものなのではないだろうか。なぜなら、虹は、それを微笑んで見上げる総ての人々を擁抱する。虹は誰をも差別せず、誰

をも拒否しない。

若い黎子にとって、その頃、不幸とは一つの瑞々しい觀念に過ぎなかった。現実にはほほ楽しいことだらけだった！ 黎子は「不幸な話」をきく度に——それが物語であれ、実話であれ——涙したが、それは不幸すらも現実の幸福の味を引きたてるために存在している一種の香料の役目を果しているように思えたからだだった。黎子は現地の学校へ入り、間もなく英語もどうにか不自由しないようになったし、ソバカスだらけの一つ年下のお茶目な男の子に、やや喜劇的で童話的な求愛を受けた。姉の暁子も、やはりボストンへ留学中だった副島藤太という学生と知り合い、これは大人の感情で熱烈に恋われる身になった。若い姉の方は、終始受け身だったが、黎子は自分も数年経ったら、そうなるに違いない運命を姉の場合に見ているようで、自分も胸を轟かせ続けた。副島藤太の父は、ビール会社の常務で、黎子の父も満更知らない訳ではなかったので、二人の交際は間もなく藤太の親たちも認めるところとなり、そのような周囲の公認が、藤太の心にも自信と余裕を取り戻させたようだった。十四歳の黎子の眼に映った藤太は、浅黒い顔を、礼儀正しい青年で、彼は暁子に外套を着せかけることから、ドアを開けてやることまで、完全にアメリカ式で、しかもそれらの振舞いは水中の魚のように自然だった。

藤太を好きな癖に、姉は、いざとなると、日本へ帰ったら大学へ行きたい、と駄々をこねたが、二十一歳で藤太の妻になることが決定しているのに、それは無駄ではないか、と説得されると、比較的簡単に進学の意志は捨ててしまった。若い二人は、藤太の友人や黎子をお伴に、フロリダの夏や、ケープ・コッドの暗い冬を見に行き、榎並一家の帰国が近づく頃には、有名なニューヨークの五番街のティファニー（宝石や銀器などの世界的有名店）で、新家庭でどうしてもほしいと思われる食器類を買い整えたりした。

「黎子ちゃんが大学へ行きや、いいわよ」

姉は自分を慰めるようにそう言い、黎子も、文学が好きだったので、高校を出たら、自分は大学へ行つてアメリカ文学を専攻しようと考えていた。ニューヨークは暗い煤けた町で、黒人たちの住む煉瓦だてのアパートは、殺風景な倉庫のようだった。もっと悲惨な黒人専用の住宅地域があるとは聞かされたが、実際にはついぞ連れて行つて貰ったことがなかった。副島藤太も、そんなところへだけは行つてはいけなさと脅すように言い、暁子も、藤太の口車に乗つて、「そんなところへ行つたら殺されちゃうから」と、好奇心の旺盛な黎子を牽制した。それで、そこでも、彼らの不幸は、黎子の中で、又もや清らかな童話に結晶した。黎子は優しい心根で、リチャード・ライトの小説や、ラングストン・ヒューズのプ

ルースなど、いわゆる黒人作家の作品を読み、マヘリア・ジャクソンの黒人霊歌のレコードに聞き惚れた。黎子がアメリカの社会に、それほど易々と溶け込めたのは、一つには、母の小夜子が津田英学塾の卒業生で語学も達者だし、父と共に戦前の外国生活の経験もあったからであった。

榎並一家が、東京へ帰つた翌年の秋に姉は結婚することになった。藤太はD銀行に就職している。副島の家では何も仕度らしいことはいらない、と言つたが、それでも、その口の下から、副島夫人は、暁子を持つて来たら「便利」なさまざまな品物を列挙した。その中には、畳を減らさないための「薄べり」のような安いものから、ミンクのストールまで、不思議な取り合わせの品々があった。

「ねえ、パパ、副島さんのところはトクするわね」

或る夕方、黎子は揺り椅子の父の傍にうずくまりながら言つた。

「そうだな。暁子のようないい娘を貰えてトクだろうな」

「そうじゃないのよ。いろいろなお道具つけて貰えてトクだと思うの」

「どっちがトクということはないさ。親たちは子供たちのしあわせのために用意するんだから」

「ねえ、パパ、うちにはそんなにいろんなものを買うお金あるの？」

黎子は昔のように甘えて、父の膝の上にそっと腰を下ろした。黎子はアメリカにいるうちにすっかり背が伸びて、爪先が床に着きそうになっていたが、下へ足をつけることは父への裏切りのように思えて、わざと、前の方へ脚を伸して父の胸に寄りかかった。

「お金はないさ。工面してるんだ。実は骨董といえるほどでもないけれど、青磁の香炉や、木彫類を少し処分した。後は会社で少しお金を借りて、何とかなるだろう」

「香炉なんか売っちゃって、パパ悲しくない？ あれ、お祖父ちゃんのお形見でしょう？」

「悲しくなんかないさ。生きている人が一番大切なんだ。娘に肩身の狭い思いをさせたくないからね」

その時、黎子は、私は決して仕度を要求されるようなうちへは嫁かない、と思ったのだが、それは一つの原型になって、ずっと彼女の心に定着したのだった。そして黎子が父の顎の下に顔を固定させようとすると、生まれて初めて、父は躊躇^{ため}らいながら、黎子の頭を軽く押しのけるようにした。

「ちよっとどいてくれ、息が苦しいよ」

しかし黎子が立ち上がると、父は間が悪そうに笑い、「黎子も重くなったなあ。赤ん坊の時と同じだと思っていると、パパは潰れそうだよ」

と笑った。

夏休みに入る二日ほど前、学校に電話があって、父が心臓の発作のため会社で倒れて入院した、と黎子は暁子から知らされた。そして、彼女が病院に着いた時、父は既に死んでいた。

2

父の死後、いつからだろう、黎子にとって世界に罅^{ひび}が入ったように感じられたのは。そんな大きな年になる迄、それに気がつかなかったとは、何という甘いことだろう、という非難を受けそうなことも知っている。第一、父の死そのものも、他の家族の父の死と比べれば、決して悲惨とは言えない。父は長く苦しまなかった。父は会社で倒れた。殉職のように見える。お葬式の手筈も何もかも、会社の人がやってくれた。それは賑やかな葬式であった。

赤むけの心臓をもった黎子は、割れ目から凍えるような風の音を聞いた。魔物たちが囁き交し、空気はその成分の密度をちよっとばかり変えたので息苦しくなったような気がする。

もう子供ではないのだから、と黎子は自分にも言い聞かせた。私はシェークスピアを少し続んだ。あそこに書いてある悲劇は、すべて「日常的」なことなのだ。これから、私はそれを、一つずつ味って行くだけだ。

さし当り、姉の結婚の仕度を予定通り進められるかどうか

が問題だったが、勝気な母は、副島家に、「主人が望んでいたことでございますから」と百々日を過ぎた後のことに、影響させる気は少しもないことを伝えた。

「お金あるの？ ママ」

或る日、黎子は姉のいないところで、こっそり母に尋ねた。「そうね。お父さまの退職金として頂くもので何とかなるから」

「だけど使ってしまったらいけないお金なんでしょう」

「だけど、ママもそのうち働くから構わないわよ」

「私も働くわ」

黎子は母の顔を見つめた。

「そうね。二人で働きましょうか」

黎子は深く頷いた。その母の一言で、黎子の運命は決ったのだった。黎子はその言葉を思い出す度に、胸が締めつけられるような気がする。母を怨んでいながらも責めているのではない。只、本当に、何と母も自分も軽々と人生の方針を決めたのだらうと思う。

ふつうの母ならそんな時、《いいえ、黎子だけは大学へやらせなきゃ》とムリするのではないかと思う。或いは、《あなたにそんな犠牲を払わせてごめんなさい》と暗い顔をするのではないか、と思う。けれど、母の母は牧師の娘だった。その祖母の影響をうけて、母は人生に対して限りなく自然な

のだ。豊かな時には豊かなように、貧しい時には貧しいように、胸を張って生きて行く性格である。

父を失うことの新たな悲しみの側面を黎子は味った。それは「屈辱」とでも呼ぶべきものだったかも知れない。副島家が、言葉の端々に、藤太と暁子の縁組を今はそれほど望んでいないということを示す瞬間があったのだ。

「藤太は、御両親揃っていらっしゃる御家庭から、お嫁さんを貰いたいと言っておりましたのよ」

という副島夫人の科白は、決して、父の死を悼んでいるとは思えない。母はそれに気づいているのかいないのか。少くとも母の考えの論理にはそのようなことはあり得ないから、母はそれを亡き人への弔いの言葉と受けとっただろうと思う。

しかし幸いにも、二人の結婚は壊れることはなかった。式の日には、副島家の人々も笑みこぼれていた。披露宴の席に飾られた父の遺影は、納得しているように見えた。

母が友人に頼んで通訳の仕事を貰うようになったのは、その年が明けて早々である。姉の結婚のために使った費用は思いのほか多額になり、残りのお金の利子だけで、母子二人が食えて行くことなど思いもよらなかった。

初めての仕事は、知人の更に知人が、アメリカから仕事上の客を家庭に招ぶというので、その通訳のためであった。母は古い絹のスーツに、嫁入った娘からその日だけ借りて来た

真珠のブローチをつけた。

「しっかりね」

冬の夕方は早く暮れる。母を送り出すと、家の中に黎子は一人になった。口笛を吹きながら雨戸を閉め、台所に入ってラジオをつけながらオムレツを焼いた。さし当り、母を心配させないためにも生活をきちんとやっていかねばならない、と思った。姉にはまだ話してないけれど、姉の部屋をそのうちに学生にでも貸そうかという話も出ていた。

未来に対する不安が、海のようにあたりをとり巻いていた。怒濤の音が心臓の鼓動の音になって黎子の心理になだれ込んでいく。世界中の人が自分達母子の存在を忘れていくような気がする。オムレツでひとり夕食を食べ終ると、黎子は父の揺り椅子のところへ来た。母が、冬になると、去年と同じように父の椅子に愛用の格子のウールの膝掛けをかけた。

クリーニングに出してしまつてあるから、そこには父の体臭は残っていない。しかし黎子はその中にすっぽりと体を包み込んだ。

《ねえ、パパ》

と彼女は小声で呟いた。

《私に仕事を見つけて下さいな。黎子、行き場がなくて困つてるんです》

父の死んだのは七月の下旬である。ほんの一、二ヵ月の差

で、目ばしい就職の口は皆決つてしまつていたのだ。けれど父にそんなことを言つたら悪いと思つて、黎子は遠廻しに言つたのだつた。

《パパ、お願い、何とかして。いい仕事を下さい。お給料は高くなくても構いません。きちんと張り合いをもてる仕事ならいいの。黎子、何でもやります。お茶汲みだつて何だつてやります。だから仕事を下さい。お願いです》

黎子は椅子の中にいる父の霊に向つて呼びかけた。

突然、電話のベルが鳴つた。黎子は走つて行つて受話器を取り上げた。

「暁子よ」

姉であつた。

「実はね、黎子ちゃんの就職の口あつたの」

黎子はいっと後をふり返つた。揺り椅子に父がいて、にこにこ笑つていふような気がする。偶然というにしてはあまりに激しく、何かの運命に掴まれたようであつた。

暁子の話では、就職先は、新橋にあるペリーマン商会といふ、有名な僧正の印のついたビショップ^{ビショップ}紅茶の総輸入元だといふ。その東京支店長と暁子の舅^{しゅうと}に当る副島十五郎はつきあいでよく会うことがあつた。

「支店長さんというのは、勿論、日本人なんだそうだけど、その方の秘書が急に結婚してやめることになつて、代りを探

してるんですって。できれば英文速記とタイプができる人ということだったけど、黎子ちゃん、タイプは打てるでしょう、と言っておいただけど。できなかったら、三月までにママから習えばいいわね」

「うん」

「とにかく一度会いたい、と言っていらっしゃるそうだけど、行ってみる？」

「行きます」

「じゃ、お舅さまに、何曜日の時頃行ったらいいか訊いておいて頂くように頼むわ」

「お願いします」

「どう？ ママ、無事にでかけた？」

覚えていてくれた人がいたかと思うと、黎子は緊張がほどこけて心が弱くなるように感じた。

「ママ、初出勤だからどんな具合かと思って」

「ブローチ、とてもよく似合った」

「よかったわね」

その夜、黎子は満ち足りて父の椅子の中に坐っていたが、結果は決して電話での会話の通り、上首尾にいつてはいなかったのだった。

十時近くになって帰って来た母は、浮かない顔つきをしていた。

「どうしたの？ 疲れたの？」

黎子は残りのもののパンで、母の夜食用にプティングを焼いておいたのである。黄金色のバターを浮べたプティングが、大きな天火の真中で、ふくふくとふくれるだけふくれて、香ばしい匂いを立てていた。

「ブローチをなくしたの、眺子ちゃんの」

母は乾いた顔つきで言った。

「どこで！」

「先方に着いたら、もうなかったのよ」

母はどんなに重い気分でも、仕事に耐えていたのだろう！

「遅くなったのは帰りに懐中電燈を買って、ママの通った道と、警察と、電車の遺失物係りもずっと調べて来たんだけど、今のところ見つからないのよ」

姉が一生使うものだから、と母は決して安物を買わなかったのだった。

「眺子ちゃんとにかく謝っておくわ」

黎子は就職の電話がかかって来たことを母に告げた。

「眺子ちゃん、ママですけれどね、先程は黎子のことを心にかけて下さってどうもありがとう。是非お会いしに行くと行ってますから」

母はまず就職の礼を言った。

「それからね、申し訳ないことをしちゃったのよ。あなたの

ブローチをなくしたの！」

「え？」

電話の声が大きいで、暁子の声は傍らの黎子にも聞えてくる。姉が狼狽し、激し、非常に不機嫌になっているのがわかる。

「私、困るわ！ かねがね副島のお姑さまから、暁子さんは装身具が足りなくてって言われているのよ！ あれなくしたら、私、お招かれにつけて行くものじゃないの！」

「ほんとうに済まないことしたわねえ」

「済まないなんて云わなくていいから、あれと同じもの、でさるだけ早く返してよ。そうすれば、藤太さんにも気づかなくて済むから」

「ええ、そうしようと思うけど」

「大体、ひとの大事なものを借りるのが悪いのよ。自分のことは自分ですればいいのよ」

「ママも今、まさにその通り思っているところなの」

ブローチは誰から買って貰ったと思っているのだろう。けれど母は決して娘に恩をきせない。黎子は息をひそめていた。

電話を切ると、天火の中から、微かにブティングの焦げる匂いがした。

「大変だ！」

黎子は慌てて天火にとびついた。

「ブティングを頂くわ」

母は氣をとりなおしたように笑って、台所の椅子に腰を下ろした。カラメル・ソースは既にできている。焦げ方も香ばしい程度だった。

「一日目は商売赤字だったわね」

黎子は母の前に熱いお菓子を切り分けながら笑った。

「大丈夫よ。ママしあわせよ。こうしてお菓子を作って待っていてくれる娘もいるんですもの」

それは本当ではなかった。母も黎子も心の中では震えていた。しかし、二人は現在自分たちが不幸であると言うことは許されないと考えていたのだった。

第二章 お茶の時間

1

榎並黎子が、ベリーマン商会・東京支社長、余語善三郎に面接したのは、煙ったような薄汚れた空気に閉された、冷え冷えとした二月の初めの或る夕方のことであった。

もっとも、ベリーマン商会のある新橋のS・Sビルの中

は、全く外界と遮断された人工的な空気の匂いを持っていた。そして余語善三郎は、黎子が入って行った時、囚人のように「小さな窓から外を見ていた。何故「囚人のように」と思えたか、黎子にはわからない。ビルの構造上、空が著しく小さかったからだろうか。

人間は誰でも囚人なのである。誰も、何かのトリコであるという状態から逃れられない。余語善三郎だけが囚人のように思えたという理由は考えられない。只、別の言葉で言えば、黎子は、彼の後姿に、割れ目を見たのである。後から思うとその裂け目から、ただし黎子はちらと心臓を覗いたような気もしたのであった。

しかし、ふり返った時、余語支社長は既に別の顔を持っていた。年齢は三十一歳だと後でわかった。父親の代からベリマン商会にいたのだが、その態度は、外国商社の支社長というより、きびきびした動作の上で旧帝国軍人を思わせる。もともと彼は、戦争中、兵隊に行くような年ではなかった。面接の時に交された会話が鮮かに黎子の記憶の中に残っている。

《何のために勤めようと思ったんですか？ 世間を見るためですか》

余語は客赦ない微笑を泛べて聞く。

《いいえ》

黎子は、ちょっと考えてから答えた。

《お金を稼がなければなりませんので》

《稼いで、どうします？》

余語は、ゆっくりと追究した。

《さし当り、母に預けて……それでもし、将来、私が結婚するようだったら、その中から仕度をしてもらいます》

《結婚はした方がいい》

余語はそう言うてから、

《御両親は御健在なんですか？》

と尋ねた。

履歴書を出したのに、この人はこまかいところを何も覚えていないんだな、と黎子は思った。

《はい、父が最近死にました》

黎子はそう言いながら、思わず俯いて、涙を洩えた。ほんの数秒であった。そして顔を上げた時、黎子は勿論、明かるい表情を取り戻していた。

《いいお父さんだったらしいな》

余語は呟いた。

《はい》

そんなに実の父を好くなんて、おかしくて、おかしくて、という思いで、黎子は笑った。睫毛の先にだけ涙があった。

《結婚は決して、あなたの理想通りになるもんじゃないだろうけど、それでもした方がいいな》